

令和 7 年第 423 回信濃町議会定例会 2 月会議会議録（3 日目）

（令和 7 年 2 月 19 日 午後 1 時 00 分）

●議長（佐藤武雄） 休憩前に続き、会議を開きます。

通告の 3、小川敬史議員。

1、不登校児童生徒への支援について

議席番号 3 番、小川敬史議員。

◆3 番（小川敬史） 議席番号 3 番、小川敬史です。今回は不登校児童生徒への支援について伺いたいと思います。文部科学省では、2023 年 3 月に、誰一人取り残されない学びの保障に向けた不登校対策、ココロプランを示しましたが、その目指す姿として①不登校の児童生徒全ての学びの場を確保し、学びたいと思ったときに学べる環境を整えます。②心の小さな SOS を見逃さず、チーム学校で支援します。③学校の風土の見える化を通して、学校を、みんなが安心して学べる場所にします、の 3 つを掲げています。また、2024 年 10 月 31 日には、児童生徒の問題行動や、不登校などの実態を調査した令和 5 年度、児童生徒の問題行動、不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果の概要を公開しました。同調査によると、病気や経済的理由を除き、心技、社会的な要因などで、小中学校に年間 30 日以上登校しない不登校児童生徒数は、ついに 30 万人を超え、過去最多の 34 万 6482 人となり、前年度から 4 万 7434 人の増加で、11 年連続で増加となっています。このように、近年の統計を見ても、不登校の児童生徒の数は増加傾向にあり、その問題は年々深刻化しています。そこで、不登校対策の柱は、第一に、不登校を生まない環境づくり、第二に、不登校になった児童生徒と保護者への支援が重要だと考えます。実際に不登校となった場合の児童生徒及び保護者の苦悩は深いものがあり、場合によっては、命に関わるケースになることがあります。そこで、町の状況を一つ一つ質問していきますが、まず、信濃小中学校の過去 5 年における、不登校児童生徒数の人数と推移について、教育委員にお伺いします。

●議長（佐藤武雄） 北村教育長。

■教育長（北村康彦） それではお願いします。ただ今頂きました、小川議員からの質問にお答えします。不登校児童生徒の推移についてというお尋ねでございますが、ただいま議員おっしゃられたように、全国的にも不登校が 11 年連続増加している中で、信濃小中学校の不登校児童生徒も増加傾向にございます。年間 30 日以上欠席をしている児童生徒についてですが、ここ数年、20 名から 30 名の中で推移している状況でございます。以上です。

●議長（佐藤武雄） 小川議員。

令和 7 年第 423 回信濃町議会定例会 2 月会議会議録（3 日目）

◆3 番（小川敬史） ただいま教育長の方から答弁がありましたが、最近のデータでいうと 20 名から 30 名、推移しているということだったんですけども、分析としてコロナ禍の影響というのを詳しく分かりますか。伺います。

●議長（佐藤武雄） 北村教育長。

■教育長（北村康彦） 不登校児童生徒数の推移に、コロナ禍が関わっているかというお尋ねでございますが、直接的な影響があったのか、ないのかについての分析はされておりませんが、例えば、コロナ以降、マスクをなかなか取らない、あるいは取れない児童生徒がいる、それをまた心配した教員が指導というか、「取って、みんなで元気にやろう」みたいなことを言っている、というようなことをお聞きするにつけ、人とのコミュニケーションとか、それから人間関係づくりにコロナ禍が子供たちに影響はしているかなと思います。ただそれが、不登校の児童生徒数の増加に結びついているかどうかについては、分析等しておりませんので、よろしくお願いします。以上です。

●議長（佐藤武雄） 小川議員。

◆3 番（小川敬史） 答弁いただきました。不登校児童数が増えているという現象は、教育現場における大きな課題になっていると思います。次に、不登校の主な理由についてですが、児童生徒が不登校になる理由は多岐にわたるものだと思います。主な理由として考えられることは、まず心理的な問題です。いじめや友達とのトラブルなど、学校内での人間関係に悩んだり、学校生活に対する過度な不安やプレッシャーなど、学校環境の不適応が原因の場合があります。また、精神的な疾患が影響する場合があります。家庭内のトラブル等、家庭環境も大きな要因です。その他、授業についていけない、理解が遅れていると感じているなど、学業面での問題で学校に行けなくなることもあります。また、病気やけがなどの身体的な問題で登校が難しくなることもあります。さらに、コロナ禍のような特殊な状況で、オンライン授業への移行や学校生活の変化が原因になることもあります。今言ったように、不登校になった理由は、社会的な背景や、学校内や家庭内での問題などが複雑に絡み合っていると考えていますが、実際に信濃小中学校の不登校の理由について、教育委員会ではどのように分析しているか、伺いたいと思います。

●議長（佐藤武雄） 北村教育長。

■教育長（北村康彦） 不登校の理由についてのお尋ねでございます。不登校の理由は、ただ今議員ご指摘のとおり、例えば、いじめや人間関係などの学校生活に起因すること、それから家庭内のトラブル等、家庭環境に起因すること、それから発達障害等、その子ども自身に起因することなど、様々なことが考えられるというふうに思います。これは信濃小中学校においても同様かな、というふうに思います。それから、これらの理由が

重なり合っている場合が非常に多くて、その辺がなかなか難しい面があるかなと。ただ私自身、長年この不登校の子どもたちと向き合ってきた経験から申し上げますと、その理由を、我々大人はつけたがるんですけども、実はその本当の理由がわからない中で子どもたちが悩み、それを抱える保護者が苦しんでいるようなことも、実際問題あるかなというふうに思っています。大切なのは、心からその子に寄り添い、共感したり、受け入れること。そして、不登校は取り巻く環境によっては、どの児童生徒にも起こり得る、誰にも起こり得るということとして捉えて、対応していかなければならないなという事を考えています。以上です。

●議長（佐藤武雄） 小川議員。

◆3 番（小川敬史） 答弁いただきました。教育委員会では、いろいろな理由が重なりあい、本当の理由がわからない中、悩んでいる方も多いと分析でしたが、これらの要因は人によって様々で、複合的に影響して、不登校の状態を引き起こすため、今言ったように、個別の理解と支援が必要だと思います。教職員の研修はもちろん、児童生徒への支援だけでなく、親御さんへの支援も合わせて力を注いでいただきたいと思います。次に、中間教室の支援体制について伺います。不登校の生徒に対する支援策として、信濃小中学校では中間教室が設置されていることは、とても重要な施策だと思います。中間教室では、学業面や精神面での支援が行われていると思いますが、実際的には、具体的にどのような支援体制で行っているのか、お伺いします。

●議長（佐藤武雄） 北村教育長。

■教育長（北村康彦） 中間教室の支援体制についてお尋ねでございます。信濃小中学校には現在、校内に教育支援センター、いわゆる中間教室というのを設置しております。不登校児童生徒や、その保護者の意思を十分に尊重しつつ、児童生徒が自分に合ったペースで学習をしたり、生活ができる場として位置付けております。ですので、その子どもを尊重した上で、それを支援する支援員として2名、町費職員を配置し、トータルコーディネーター等と連携しながら、どのような支援がその子に合っているかということを見定めながら、取り組んでいるところでございます。その他、不登校児童への支援としては、ソーシャルスキルワーカーとのカウンセリングとか、もちろん本人、あるいは保護者の希望がないとやりませんけれども、そういうものとか、あるいは今、議員さんがおっしゃられたような家庭の支援、保護者家庭支援、何かも含めながら、多面的に支援をしていきたいというふうに考えているところでございます。以上です。

●議長（佐藤武雄） 小川議員。

◆3 番（小川敬史） ただ今、中間教室の支援体制について答弁いただきました。先ほども言いましたように、不登校の理由や背景は個々に異なるため、支援方法も一式ではな

く、生徒一人一人にあった柔軟な対応が求められます。また、家庭との連携もとても重要で、中間教室での支援だけでなく、保護者との密な連携が重要だと思います。そして、不登校児童生徒に対する理解を深めるためには、教職員の研修やスキルアップが大切だと、必要だと思います。これらの工夫を通じて、中間教室での支援の質をさらに向上させることを期待しています。次に、不登校児童生徒のうち、中間教室、オンライン授業、フリースクールを利用しているそれぞれの割合についてお伺いします。

●議長（佐藤武雄） 北村教育長。

■教育長（北村康彦） 施設等の利用の割合のお尋ねでございます。今年度、教育支援センター、中間教室を利用している児童生徒は、不登校児童生徒の 40 パーセントほどです。それから、オンライン授業につきましては、3 パーセントほど、フリースクールを利用している児童生徒は 7 パーセントほどとなっております。なお、中間教室、フリースクールと両方利用している児童生徒もございます。以上です。

●議長（佐藤武雄） 小川議員。

◆3 番（小川敬史） ただ今、支援手段を利用している人数、割合の説明をいただきましたが、中間教室 40 パーセント、オンライン授業 3 パーセント、フリースクールの人数が 7 パーセントということで、その他の 50 パーセントはどうなっているのかなと思うんですけども、伺いたいと思います。

●議長（佐藤武雄） 北村教育長。

■教育長（北村康彦） 今、数字として上がってこなかった残りの生徒についてですが、まず前提として、不登校というだけで問題行動であるというふうな受け取りをしないということが大前提です。ですので、それに基づいて、先ほど来、申し上げているように、不登校児童生徒の意思、あるいは保護者の希望を尊重しつつ、どのように学習するスペースや生活する場を作っているかというところに力を割いて、学校現場では対応しているように伺っています。ですので、年間 30 日の欠席といいましても、月に換算すると 2、3 日というようなこともありますので、そういうお子さんは、直接教室の方に入って学習をしているというようなこともあるでしょうし、学校の方でオンライン学習を進めたり、あるいは中間教室に来てはどうだ、という中で、まだそこまで行っていないから休みたい、というようなお子さんもいるかなと。かつてはというか、今もそういう考え方が多いんですけど、不登校の時期がマイナスに捉えられがちだけれども、不登校の時期が休養を取ったり、自分を見つめ直す、あるいは自分の好きだとか大好きというものを見つける時間として、前向きに捉えながら支援をしていくということが大事なかなと。不登校であったことをもって、マイナスに捉えて汚点として考えるような支援はしていきたくないの、まずは、子どもたちの、あるいは保護者の意向を十分に汲んだ上支援し

令和7年第423回信濃町議会定例会2月会議会議録（3日目）

て、その結果の50パーセントということだと思います。以上です。

●議長（佐藤武雄） 小川議員。

◆3番（小川敬史） 答弁いただき理解をしました。不登校生徒の支援手段の利用状況は、地域や提供されるプログラムによって異なるものの、多様なニーズに応じた柔軟な学びの場を確保することが重要です。本町においても、関係機関と連携しながら、これらの支援手段の充実を図り、不登校生徒一人一人に寄り添った支援を求めて、次の質問に移ります。次に保護者からの要望について伺います。不登校を抱える家庭からは、学習面だけでなく精神的なサポートや、社会的な孤立を防ぐための支援が求められています。実際に保護者から寄せられる要望の中で、多い内容についてどのようなものがあるのでしょうか。また、それらの要望に対して教育委員会として、どのような対応をしているのか伺います。

●議長（佐藤武雄） 北村教育長。

■教育長（北村康彦） 保護者からの要望についてのお尋ねでございます。こういった要望が多いかということ、その割合はちょっと分かりませんが、保護者から学校へ寄せられている要望、あるいは相談の例について、学校から聞きとったものがありますので、それをお答えしたいと思います。「学校以外に通える場所があれば教えてほしい。」それから「学習の遅れが心配。家にいながら勉強ができる方法があれば知りたい。」「家にいても、もっと学校の先生たちに関わってほしい。」「友達との関わりが少なくなるのが心配。オンラインでも友達と関わる機会を作りたい。」というようなことを学校から聞き取りをしました。そうした要望や相談については、不登校児童生徒の意思、どのように今過ごしたいのか、それから、保護者の希望等を聞きながら対応しています。学習をするような希望があれば、そういう場としてオンライン授業や中間教室に来たらどうかとか、あるいは、他の学習場所を希望する場合には、違う場所を紹介したりしているというような状況でございます。以上です。

●議長（佐藤武雄） 小川議員。

◆3番（小川敬史） ただ今、上がっている要望について答弁いただきました。恐らく、不登校の子どもを抱える親子さんたちの最大な悩みは、どうすれば不登校から脱出できるのかだったり、今の要望にもありました、学習上の環境だったり、友達との関わりだと思います。不登校になったきっかけは、子どもによって本当に様々です。中学校になり、勉強がついていけなくなった、先生や部活の先輩からの心ない言動に傷ついた、団体生活が苦手、いじめなど、他にたくさんのきっかけがあります。ですから、学校に行けなくなったという時点で、子どもたちは、エネルギーが切れて動けなくなっているんだと思います。多くの子どもたちは親に知られず、自分が抱えている問題を乗

り越えたいと思っています。しかし、学校に行けなくなり、みんなにも知られ、そんな自分が受け入れられなくなり、誰にも会うことができなくなります。なぜ、私がこんなに不登校の児童生徒や、保護者のお気持ちをお話するかというと、実は私も信濃小中学校1年生の9月から3年生の春までの1年半以上も学校に行けず、不登校になった経験があるからです。自分が不登校になった過去を思い返すと、中学校に上がり、小学校との環境の変化についていけなかったこと、中学校に入ってクロスカントリースキー部に入り、全国でも活躍する選手になろうと張り切って練習をしていた矢先に、疲労骨折になり、練習ができず、マネージャー業に徹する毎日。周りがどんどん成長する中、自分は何もできないという葛藤に自信を失い、ふと周りを見たときに、自分だけが取り残されてしまっている状況に急に胸が苦しくなり、ついに学校に行けなくなりました。その後も、自分が学校に行けなくなったという現実を受け入れられず、毎日親が仕事に行き、帰ってくるまで自分の将来はどうなってしまうんだろう、親に申し訳ないと、茶の間で、同じ場所で毎日泣いていたことを思い出します。不登校の期間が長引くにつれ、エネルギーが充填できてきたのか、信濃中学校へは行けないが、他の中学校なら行きたいという思いが強くなってきました。その当時は、今のようにフリースクールも近くにありませんでしたので、学校に代わる学び場の選択肢がほかにはありませんでした。幸い、私がその闇から抜け出せたのは、たまたま以前、信濃中学校の教頭先生をしていた方が、長野市の中学校で校長先生をされており、環境を変えて、長野市の中学校に転入してみないかと、声をかけていただいたことです。転校を決意し、以前から好きだったサッカー部に所属し、始発電車で、中学校のときから長野まで通い、帰りは終電で帰ってくるという、授業と部活動をこなす毎日でした。そんなハードな学校生活でも、毎日、学校の先生やクラスの仲間、そして家族の支えがあって、無事に中学校を卒業できました。私が不登校だった間、学校へ行きたくても行けない自分も、とても苦しかったが、それ以上に親も、自分の子供が学校に行けなくていけないのかと、苦悩の日々だったと思います。何が言いたいかと言いますと、不登校になった児童生徒、そして家族は、毎日とてつもない不安と戦っているということです。ですから保護者からの要望がありましたら、真剣に向き合い、誰一人取り残されない学びの保障に向けた、対策をしていただきたいと思います。最後に、フリースクールへの費用補助について質問させていただきます。フリースクールは、学校に行きたくても行けない児童生徒の学校に代わる学びの場です。柔軟で、支援的な学びの場を提供している一方で、私立の施設であるため費用が高額となります。月謝については平均で3万3000円、長野市周辺のフリースクールの月謝は4万円ほどだと言われています。そのため、保護者の負担が大きいと、経済的な支援が必要だという声が上がっています。長野市では、フリースクール等民間施設利用料助成事業というものがあって、入会金や教材費などを除いた補助対象経費の2分の1以内の額で、1か月あたり1万3000円を上限とした補助を行っています。年々増えている不登校児童生徒を支援するため、フリースクールも増えています。小中学校には行けないけれど、高校へは行きたい子どもたちも大勢います。そんなときに、学校に代わる学び場として、柔軟な支援をしているのがフリースクールです。信濃町においても、そんな学習意欲のある児童生徒や、保護者に対して、フリースクールに対する費用

令和 7 年第 423 回信濃町議会定例会 2 月会議会議録（3 日目）

補助の導入を検討する必要があるのではないかと考えます。現在教育委員会では、フリースクールへの費用補助に関して、検討しているかどうか伺いたいと思います。

●議長（佐藤武雄） 北村教育長。

■教育長（北村康彦） フリースクールへの費用補助についてでございます。不登校児童生徒への支援は、いろいろな状況のお子さん、いろいろな背景のお子さんがいる中で、学校に登校するという結果のみを目標にするということで、逆に、お子さんを苦しめてしまうこともありますので、様々なフリースクール等の選択肢が用意されることが大事なかなと、学校に来ることだけを目標にするのではないということの中で、大事なかなと思います。そんな中でも、児童生徒がこれからの進路を主体的に捉えたり、それから、社会的に自立していくことを目指していくところを大事にしていく観点から、とにかく子どもたちの学業の遅れや、進路選択上の不利益が生じないような対応を取っていくこと。フリースクールを始め、いろいろな過ごす場所や学習する場所、あるいは、オンラインの学習、ICT を使った教育等あるんですけども、そんなことを考えていかなければならないというふうには思っております。フリースクールについてですが、長野県では今年度から、信州型フリースクール認証制度を創設しまして、不登校の子どもへの支援を中心に活動する事業者を認定の対象として、経費について支援を行っております。現在、当町にはフリースクールがございません。また、この県が認証している信州型フリースクールを利用している児童生徒も現在おりませんので、そんな状況を勘案する中で、フリースクールへの補助については、町として今のところ予定はございません。ただし、他市町村の支援の状況も参考にしながら、実際そういうフリースクールに通う子どもたちが出てくるとした場合については、対応について他市町村の状況も考えながら、検討していきたいなというふうに考えております。以上です。

●議長（佐藤武雄） 小川議員。

◆3 番（小川敬史） よく他市町村との動向を見てという行政の答弁をよく聞くんですけども、不登校になってしまった子どもたち、フリースクールへの補助は大変重要だと考えます。東京都の小池百合子都知事が、国に先行してという言葉が以前ありましたが、信濃町も、他市町村等の動向を見るのではなく、先行してこういった取り組みを、動向を見ずに、先行して行っていただきたいと思います。ここで、不登校のお子さんをお持ちの親御さんから頂いたメールを読ませていただきます。信濃町にはフリースクールがありません。また、良いフリースクールは遠方にあるため、送り迎えが必要です。また、子どもだけで電車で通わせることも現状では難しいです。さらに、月謝が約 4 万円と高額で、送り迎えの手間もかかるため、金銭的な負担が大きく、非常に困っている方が多いです、という内容でした。また、長野県が市町村教育委員会にフリースクール利用への補助制度を導入するよう求めています。北村教育長は、常日頃から、町のことを知ろうといういろいろなところに顔を出し、そのときにできない理由を述べるより、どうやった

ら実現できるか考えたいと、前向きな意見をおっしゃっていて、すごい教育長だなと私は思っています。学校に代わる学びの場を求めてフリースクールに通っている、あるいは、今後のフリースクールの利用を検討している児童生徒やその保護者にとって、この制度は大変重要な意味を持ちます。是非、信濃町でも前向きに検討していただきたいと思います。この質問は、以前亡くなってしまった森山木の実議員もしておりました。フリースクールに通わせたくても、金銭的に困っている家庭もあるので、少しでも保護者の負担を減らすよう、施策を求めます。また、これから未来ある子どもたちの可能性を消さないように、今後保護者の声を反映させ、柔軟な支援や支援体制の拡充を最後求めまして、私の一般質問を終わります。

- 議長（佐藤武雄） 以上で、小川敬史議員の一般質問を終わります。この際、1 時 45 分まで、休憩といたします。

（終了 午後 1 時 35 分）